

「神に立ち帰らせる」

マラキ書 第4篇 5節～6節
ルカによる福音書 第1章 8節～23節

説教 岡村 恒 牧師

待降節(アドヴェント)を迎えました。先週、終末の希望と喜びとを確認し、主のご再臨を心待ちにしながら、悔い改めの時を過ごします。

本来なら、世の終わりを見つめたら、私たちに残るものは絶望だけでした。私たちの全てをご存知である全知全能の神の前に立つ日を、希望を持って待つことができる者など、一人もいないのです。「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。」旧約聖書の最後、マラキ書4章5節の言葉です。本来、大いなる恐るべき日である終末の前に、主は預言者を遣わし、準備をした上で、救い主をお送り下さいました。

まず、ザカリヤとエリサベツという年老いた夫婦に、幼な子の誕生、という約束が語られました。その子は、「イスラエルの多くの子らを、主なる彼らの神に立ち帰らせるであろう。」(16節)と約束されました。当時も、多くの者が、神に背中を向け、遠く離れ去ってしまっていました。神によって呼びかけられ、立ち帰らせて頂かなければ、誰も、神の元にたどり着くことなど出来ないのは、今日も変わらない現実です。

祭司の務めは、神から離れてしまった人々のために聖所に入り、香を焚きながら執り成しの祈りを捧げることでした。私たち人間は、自分の祈りが神にまで届くかのように誤解をし、しばしば思い上がります。日常生活の中では、神に祈ることも、香を炊くこともできないのに、それでもなお勝手に期待します。

聖書全巻は、このような私たちの祈りを、私たちの不信仰にもかかわらず、神が聞き上げて下さると記しています。神への祈りが応えられない、そういう絶望を噛みしめながら生きてきた老夫婦、ザカリヤとエリサベツは、深い悲しみと絶望とを抱えていました。この日、天使のみ告げを聞いても、とうてい受け入れることができません。「どうしてそんな事が、わたしにわかるでしょう。」と拒絶してしまいます。神の御計画が、ザカリヤの予想や期待をはるかに超えていたからです。

私たちの人生の中で、実現していくのは神の御計画です。それは、しばしば私たちの願いや期待とは異なります。ザカリヤのように、「どうしてそんな事が」と反論したくなるような事が繰り返して起こるのです。

ザカリヤというのは「主は覚え給う」という

意味の名前です。神が自分のことを御心に留めていて下さる、ということを感じて告白する名前です。神の御計画を受け入れることができずに拒絶する者さえ、神は覚えて下さり、すべての人の救いのためにお用い下さいます。エリサベツという名前には「主は誓い」という意味があります。神が約束をし、その約束を誠実に守るお方だと告白しています。そして、この二人の子ヨハネは、「主は恵み深い」という名前です。

私たちの期待に合わないことが起こると、私たちは激しく抵抗し、神に逆らいます。しかしこの家族に起こったことは、神が恵み深いお方であることを明らかにしています。私たち自身は、本当に何が必要で、何を求めたら良いか、少しも理解していません。神に救いを求めて祈りながら、神の救いを拒絶してしまうのです。

アドヴェントに私たちは、悔い改めの日々を過ごします。懺悔や後悔ではなく、「方向転換」をする日々が与えられています。神に背中を向けて歩んできた者が、向きを変え、神に向かって歩き出すのです。

ザカリヤは、子どもの誕生までの間、沈黙の中に置かれました。それは、方向転換をして、神に向かうための沈黙でした。与えられる子どもを通して神が実現して下さる救いの御計画のために祈り、黙想して過ごすための準備の沈黙が与えられました。やがて与えられた息子、洗礼者ヨハネは、神が恵み深いお方であることを証し、悔い改めを呼びかけ、多くの人に悔い改めの洗礼を授けるようになります。

神は祈りを聴いて下さるお方です。全知全能の神は、私たちに無くてはならないものをお与え下さいます。私たちの期待などはるかに超える救いを用意して下さいました。神の救いの御計画は、確かに実行されました。主イエス・キリスト、神のひとり子が地上に来て、あの十字架にお架かり下さったのは、神が私たちの祈りを聞いて下さったから実現したことなのです。

やがてザカリヤの口から、神をほめたたえる賛美の歌が響き出ます。同じ賛美、信仰の言葉が、私たちにも与えられています。神が確かに私たちの祈りを聞いて下さり、私たちを神に立ち帰らせて下さったと。アドヴェントに、私たちは方向転換へと導かれ、喜びと希望を抱いて、主のご再臨を待ち望みつつ、主を褒め讃えて歩みます。

(記 岡村 恒)